



埼玉県立入間わかくさ高等特別支援学校
地域支援・連携部通信

リンク

第2号 2017. 9. 12 (火) 発行

ホームページアドレス

<http://www.wakakusa-sh.spec.ed.jp>

夏季休業中研修会報告

夏休み期間中、地域支援・連携部主催で実施した研修会の成果報告をいたします。

- 1 『働く現場における特性を理解した支援』
～見える化を意識したつどい福祉会での実践～
社会福祉法人 つどい福祉会 加藤順一 氏
- 2 『詩が開いた心の扉』
～奈良少年刑務所での9年間の取組から～
作家・詩人 寮 美千子 氏
- 3 『教育と福祉との連携・協働』
進路に関わる取組み及び福祉・雇用制度の概要
本校進路指導主事 奥山博司
コーディネーターの役割 連携支援会議を中心に
本校特別支援教育コーディネーター 平岡知子
福祉と教育のつながり
さほねっとステーション/生活支援センター日向
相談支援専門員 秋山あや 氏
- 4 映画上映会
『ぼくはうみがみたくなりました』



★ もっと自閉症を知って貰いたいと思ったとき、「ぼくうみ」はここにある。

映画「ぼくはうみがみたくなりました」制作実行委員会



『ぼくうみ』制作実行委員会HPより

ぼくはうみがみたくなりました。通称「ぼくうみ」は、自閉症の青年が主人公の劇映画です。ドラマ作品です。ドキュメンタリー作品ではありません。

主人公の行動や言葉が学校生活の中で見せる生徒の姿と重なり、とても親しみやすく共感の持てる作品でした。自閉症の本人のことだけでなく、親や兄弟姉妹のこと、社会のあり方についても考えることができ、より強く生徒の気持ちに寄り沿っていきたいと思いました。(普通科1年担任)

『働く現場における特性を理解した支援』



8月28日、「働く現場における自閉症の特性を理解した支援」をテーマに教職員研修を行いました。

構造化について、実践と根拠に裏打ちされたご講義から、次の二点を考えさせられました。

「どのように生徒と関わっていくか」

「構造化をどのように実践していくか」

特に印象に残ったのは、「「頑張ってしまう」と見るか「辛いと言えない」と見るかで、全く指導方法が変わる」という言葉でした。当たり前のことながら、常に生徒の特性を意識していくということを再認識し、これからの指導に生かしていきたいと思います。

＊構造化とは？

今何をするのか、次にどうなるのかなど、その人にとってわかりやすく示す方法。

(生産技術科1年担任)



『教育と福祉との協働・連携』

【進路に関わる取組及び福祉・雇用制度の概要】

この研修を通じて、生徒の進路に関わる取組として改めて感じたことがありました。当たり前のことを精一杯やるということです。それは、「毎日の授業を一生懸命受ける」、「マナーやルールを守る」、「善悪の判断ができる」、「規則正しい生活を送る」などです。これらの積み重ねが、希望する進路へとつながっていきます。私自身、生徒が希望の進路先に進むために、当たり前のことや当たり前のようにできる指導を進めていこうと思いました。(流通・サービス科1年担任)

【コーディネーターの役割】

コーディネーターとは「支援をつなぐ」役割を担っていると再確認しました。学校内での支援体制づくりや校内研修の企画、運営のみならず、福祉や行政、医療などを行う連携支援会議の参加者でもあります。生徒一人一人の生活の場所、働く場所、相談できる場所を、学校から地域へと「つなぎ」、よりよい環境にする「窓口」であるとも感じました。そして、私もそのつながりの中の一員として、生徒を見つめる視点を養っていかなければと思いました。(普通科2年担任)

【福祉と教育のつながり】

生徒たちは家庭や学校での生活以外に、福祉や医療を利用する機会があります。放課後デイサービスの職員の方には、その日の学校での様子などを簡単に伝えたりはしますが、それぞれが何を目標に支援しているのかに関しては、教育と福祉がつながっていかなくてはズレが生じてしまいます。また、生徒たちは環境によって見せる姿が違います。生徒の理解には様々な視点が必要であるので、福祉と教育のつながりは大事だと改めて感じました。(普通科3年担任)



詩が開く心の扉

寮先生の生命力と愛、ご経験と科学的根拠に裏打ちされた言葉に引き込まれ、あっという間の2時間半でした。アンケートの多くに「あたたかい気持ちになりました」「心に響く言葉がたくさんありました」「何度も涙を流しました」とありました。いくつかご紹介します。

- ・人は人の輪の中で育つ。
- ・安心安全な場にいらるだけで自己表現できる。自己表現できる場があるから、表現を認めもらえるから心が癒される。共感してくれる仲間がいるから力を発揮することができる。
- ・「やらなくてもいい」という選択もある。

くも

空が青いから白をえらんだのです

Aくんは、普段はあまりものを言わない子でした。そんなAくんが、この詩を朗読したとたん、堰を切ったように語りだしたのです。

「今年でお母さんの七回忌です。お母さんは病院で

『つらいことがあったら、空を見て。そこにわたしがいるから』

とぼくにいつてくれました。それが最期のことばでした。

おとうさんは、体の弱いおかあさんをいつも殴っていた。

ぼく、小さかったから、何もできなくて……」

Aくんがそう言うと、教室の仲間たちが手を挙げ、次々に語りだしました。

「この詩を書いたことが、Aくんの親孝行やと思いました」

「Aくんのおかあさんは、まっ白でふわふわなんやと思いました」

「ぼくは、おかあさんを知りません。でも、この詩を読んで、空を見たら、ぼくもおかあさんに会えるような気がしました」

と言った子は、そのままおいおいと泣きだしました。

自分の詩が、みんなに届き、心を揺さぶったことを感じたAくん。

いつにない、はればれとした表情をしていました。

たった一行にこめられた思いの深さ。そこからつながる心の輪。

「詩」によって開かれた心の扉に、目を見開かれる思いがしました。



寮先生と出会ったこと、講演会の場で先生の言葉と声を共有した仲間として、家庭で、社会で、そして学校で、生徒たちとどう向き合っていくのか。

(コーディネーター 春木)

すきな色

ぼくのすきな色は

青色です

つぎにすきな色は

赤色です

何も書くことがなかったら、すきな色について書いてください。そう課題をだして、Bくんが提出した作品がこれでした。

あまりにも直球。

いったい、どんな言葉をかけたらいのか、とまどっていると、

受講生が二人、ハイッと手を挙げました。

「ぼくは、Bくんの好きな色を、一つだけじゃなくて二つ聞けてよ

かったです」

「ぼくも同じです。Bくんの好きな色を、二つも教えてもらって

うれしかったです」

それを聞いて、思わず熱いものがこみあげてきました。

世間のどんな大人が、どんな先生が、こんなやさしい言葉を、Bく

んにかけてあげることができるでしょうか。

「Bくんは、ほんま赤と青が好きなんやあって、よく伝わってき

ました」

仲間の言葉のすべてが、Bくんへの大きな励みです。

普段、あまり表情のないBくんの顔がふわっとほころび、笑顔が咲

きました。

こんなやさしい、こんな素朴な子達が、どんな罪を犯したのだろう。

なぜ、犯罪者になったのだろう。そう思わずにいられませんでした。

